

KIPA Design Competition
for STUDENTS 2021

Award Book

ツナグ+DESIGN



Kansai Interior Planners' Association

ツナグ + DESIGN

関西インテリアプランナー協会は、その活動メッセージとして、インテリアデザインによって、様々な現象、事象、物、ことを融和的に繋いでいくことの可能性をひとつのテーマとしています。

この度、学生対象のインテリアコンペティションを開催し、広く学生の方々の英知を公募し、その先進的なアイデアを広く世界に「繋げて」いくことを企画しました。

KIPA 第4回 デザインコンペティション 2021 ビエンナーレ

『“ WAITING ” - 「待つ」を豊かにする空間』

コロナ禍は私たちの生活を大きく変えました。

その一方で、これまで見過ごしていた、時間や場所の大切さを教えられたかもしれません。日常のあらゆる場面、例えばバス停や駅で、病院やお店でも、少しの時間ですが、もっと大切に豊かに過ごすことができないのでしょうか。

ここで、我々は“WAITING”という行為に焦点を当て、一「待つ」を豊かにする空間一を提案したいと思います。

「待つ」ことは、時間を浪費することではありません。コロナ禍を経験した若い世代から、新しい生活様式における英知を期待したいと思います。皆さんの新しいイメージで、豊かに過ごす場としての、新しい“WAITING”スペースを創造し、ご提案願います。

あなたは、何を、どのように待ちますか？

主催

一般社団法人 関西インテリアプランナー協会

〒541-0052
大阪市中央区安土町1-7-13 トヤマビル本館 9F
TEL：06-6266-5735 FAX：06-6266-5745

総評

KIPAデザインコンペティションは、学生へのインテリアプランナーの認知度向上と、建築やデザインを志す学生からの提案により、世代や社会をつなぐことを目的としてスタートしました。第4回はコロナ禍により、大きく変化した生活から、これまで見過ごしていた時間や場所の大切さを問う「“WAITING”一待つを豊かにする空間」をテーマとしています。

課題では、立地も規模も自由とし、いかに「WAITING」という行為の本質を解くかという命題を秘めることにしました。応募作品は都市から家具のスケールまで、具体的な場や形を示すもの、システムや概念と連動して解決を図ろうとするもの、待つことそのものの意味を変えようとするもの、あるいはそれらを併せ持つものなど、さまざまな角度から柔軟な思考による提案をいただき、若い世代の先鋭的な感性に改めて気付かされた次第です。また作品のプレゼンテーションとしてのグラフィックデザインは、BIMやCGから手描きまで、その多様性と完成度には、目を見張るものがありました。評価の高かった作品は、その表現とコンセプトとが絶妙に交錯し、見る人を魅了することに成功したと言えるでしょう。同時にオリジナリティ性の高さや社会へのメッセージ性が評価の分岐点になりました。若い世代のこれらの提案が、やがてそのデザインにより営まれる行為や、そこに生まれる心情のプロセスへ、さらには社会的影響力を獲得していくことを願って止みません。

最後になりますが、このコンペティションには全国から多数の応募が寄せられました。海外からの問い合わせもあり、最終的には高いレベルの作品がこれまで以上に多く寄せられたことは、情報化とグローバル化のさらなる進化を伺い知れます。克服か共存かという答えは得られないにしても、コロナ禍を経験した若い世代により競われた創作がここに集い、この応募作品の収録と作品展の開催ができることに、大いに喜びを感じています。

一般社団法人 関西インテリアプランナー協会 会長 小梶 吉隆

審査委員

審査委員長

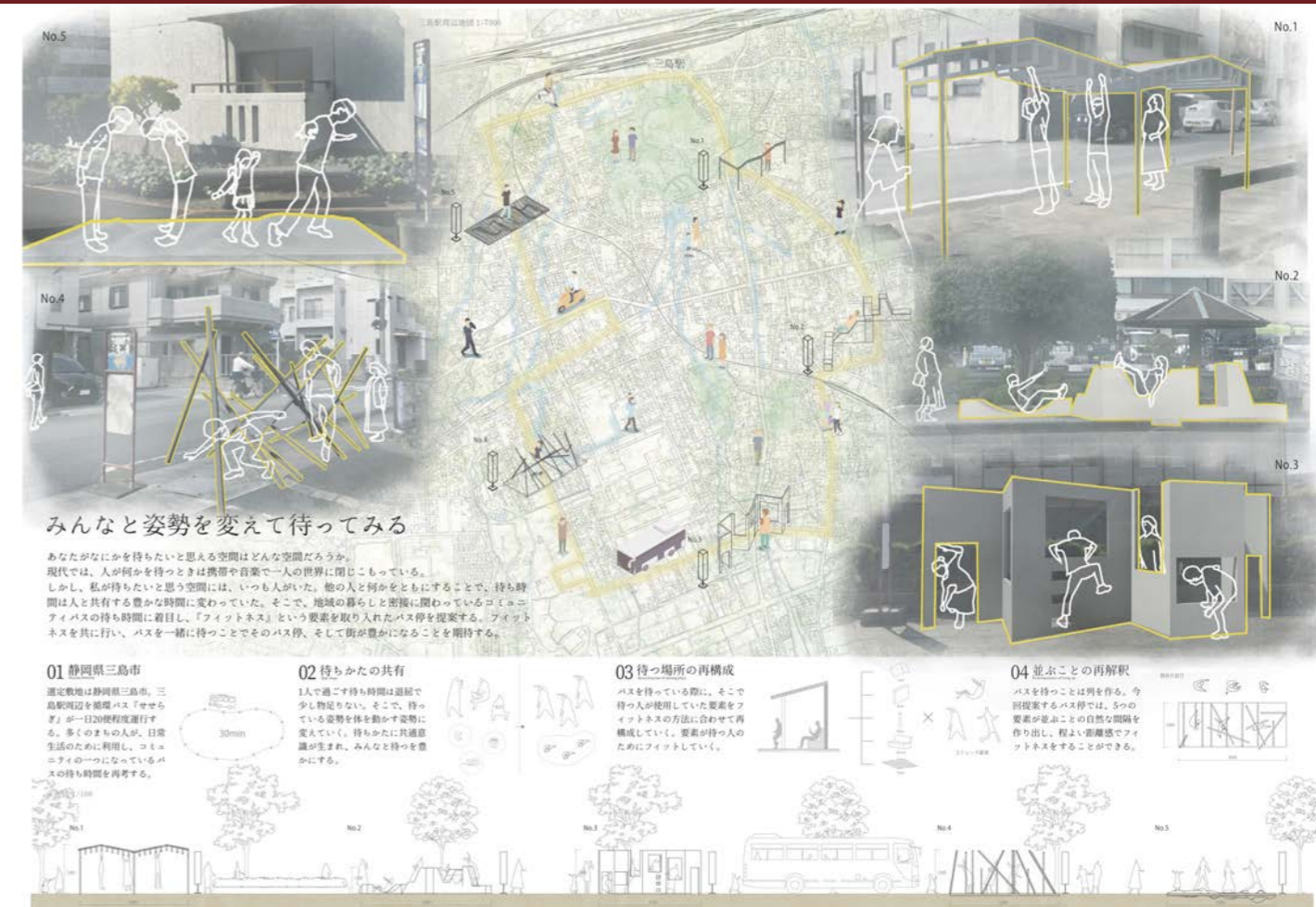
・小梶 吉隆 (一般社団法人 関西インテリアプランナー協会 会長)

審査委員

・石津 勝 (大阪芸術大学 准教授)
・岩田 章吾 (武庫川女子大学 教授)
・岡本 清文 (近畿大学 教授)
・小川 千賀子 (株式会社 デザインクラブ 代表)
・角田 暁治 (京都工芸繊維大学 教授)
・川北 英 (京都建築大学校 校長)
・菅野 忠司 (株式会社 イリア 関西事務所 所長)
・佐熊 孝浩 (株式会社 総合資格 関西本部 本部長)
・立山 智佳子 (高島屋スペースクリエイツ 株式会社 デザイン本部 副本部長)
・中村 俊郎 (イチマルヨンロク デザイン 代表)
・藤本 英子 (京都市立芸術大学 教授)

入賞作品リスト

最優秀賞	みんなと姿勢を変えて待ってみる 石井 健成・榎木 喬	工学院大学大学院
優秀賞	撮り鉄たちの『プラットホーム』 渡部 颯	京都建築大学校
優秀賞	バス停ライブラリー 玉置 耕大	千葉大学
優秀賞	Bio STOP ～小さな地球が作り出す偶然の産物～ 市原 佳奈・杉江 里佳子	愛知工業大学
佳作	SunRise Cliff ～新年を待つ～ 阪本 花梨・川勝 実結	京都建築大学校
佳作	60秒のart 榎 和美	大阪産業大学
佳作	時間が流れる駅 関根 大輔・渡邊 智哉・和田 直輝・林 明歩・長山 和奏	日本工業大学
佳作	彼方者と再会するまで 日高 理紗子 濱本 舞・力武 真由	京都工芸繊維大学大学院 東京工業大学大学院
佳作	滲みあう光色 佐藤 良介・杉本 莉奈	東京大学大学院
佳作	待行為の拡張【出会いの結び目】 上野 将輝・八木 このみ・山田 隆介	東京理科大学大学院
佳作	エキマチパーク 菊池 凌平	東京工業大学大学院
佳作	Daily life to read 読む日常。 圓戸 壘	京都美術工芸大学
協賛企業賞	TIME JACK 川崎 恵李・井沼 満・小谷部 彩咲・藤井 夏希・水口 久海	滋賀県立大学
協賛企業賞	FRUITS × CHAIR 黒木 裕哉	大阪産業大学
協賛企業賞	雨上がりを待つ 高木 遙花	大阪産業大学



石井 健成・榎木 喬 工学院大学大学院

[waiting] というテーマに対し、待つことは「苦痛」でありそれを開放してあげよう、という提案者が多かった。それらに対し、この提案者は待つことをまったく苦痛と思っていないようで、逆に心待ちにしているようである。あろうことか、他人までも巻き込んで、姿勢を変えて一緒に待ちましょうと言っている。バス停付近に集まったこの待ち人たちは、バスが来るまでのパフォーマンスであり、バスが来るたびにパフォーマンスは入れ替わる。変化していくこの風景は劇場での場面の一齣となり、そのステージをきっと見に行く待ち人がまた多く集まるのだろう。「待ち人の連鎖」が街中に広がり、静岡県三島市は待ち人達のほほえましい劇場空間になっていく。想像するに痛快である。

講評：審査委員 菅野 忠司

撮り鉄たちの『プラットホーム』 -SLを待つ、シャッターチャンスを待つ、友を待つ-

鉄道ファンの現状

鉄道趣味は古くからあり、子供たちから配者まで年齢を超えて広がっています。近年では欧米や中国などの海外からのファンも増加傾向にあります。この鉄道を撮影している鉄道ファン達を「撮り鉄」と呼ばれています。

鉄道写真のコンテストも数多く開催されており、大きなものから地方開催、各写真スポット、最近ではSNS投稿での参加などがあり、とても賑わいのある人気のある趣味となっています。

一方で、良い写真を撮りたいために列車通過の直前まで前から多くの人々が集まり、交通の混乱になることや、立ち入り禁止の場を踏み入れ、事故に及ぶ人も少なくありません。

これらの問題を解決することによって、多くの鉄道ファンたちがSLを楽しみ撮影することが必要と望まれます。

今回の提案によって撮り鉄たちだけでなく、地域の発展や自然景観保護にも貢献できることを期待しています。



真岡線を通る気を取り鉄

海外の事例

アルプスの麓の線路沿いでは、自分たちで席を確保しお酒をたしなみながら、貴重な時間を過ごしています。海外では土地が広く、人や列車に当たりどの場所からでも撮影を鉄道風景を写真におさめることが出来ます。

一方日本では、一般の方が足を踏み入れることは出来ない土地が多く、撮影の風景を望んでいる人が少なくもいます。海外のように広く土地を確保することが出来れば安全に鉄道を観ることが出来るのでは？



アルプス周辺の線路沿いの風景

撮り鉄たちの聖地 真岡鉄道

茨城平野の真ん中を走る真岡鉄道は典型的な赤毛ローカル路線です。一方で、季節ごとに訪れるSL愛好会や全国のSLファンにとって一度は体験してみたいイベントとして有名です。C57の二連走やSLの女王と言われたC62、現在はC12が御本林を背景に走る風景を撮影するために朝早くから多くの撮り鉄たちが全国から集まり地域の活性化にも一役買っています。

一方で、加熱気味のファンたちの危険な行動や迷惑行為も地域にとってはマイナス要因となっています。



現在見られる気もおか C1266



計画地と周辺の状況

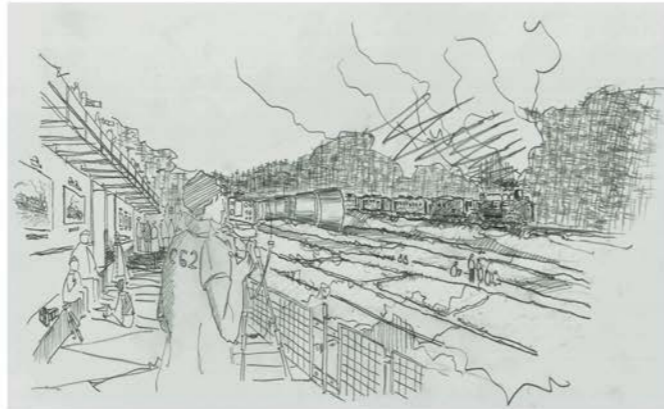
撮り鉄 5大マナー

- 1. 待つべき時は待つ。
2. 他人の撮影に邪魔にならないように、線路に近づきすぎない。
3. 勝手に民家や田畑に侵入しない。
4. できるだけ公共交通機関を利用し、自家用車を利用する場合は遅くても駐車場を利用する。
5. 撮影者の邪魔にならないようにし、特に二脚を使う場合は気を遣うこと。

計画の土地と目的

車庫駅と新原駅の中間地点 背割に森があり鉄道と緑の木々がよく調和する場です。この場に撮り鉄たち専用のプラットホームを計画しました。

現状の問題は「待つ」にあります。撮影の場所取りから鉄道の通過まで長い時間がかかります。この時間を有効に活用できるように考えました。
・鉄道の通過時間より早く来るファンに駐車場、ベンチ、カフェ、イベントなどを設け順番で席に過ごせるようにする。
・プラットホームのどこからでも良い写真を撮れるようにする。
・撮り鉄の迷惑行為である、田んぼ等の不法侵入、ゴミ捨て、線路脇付近などの行為を抑制する。



展望台下階デッキスペースから見たスケッチ

設計ポイント

- 1. 建物全体は線路と水平に延長とし、どこから撮影しても良い写真が撮れるようにした。
2. 一階のデッキがけで高いアツタから狙えるように二階および展望デッキを計画
3. 近隣に迷惑をかけるように、駐車場およびバイク置き場を併設
4. 雨天時も撮影が出来るように、庇やビロイ空間を設置
5. 会場のまわり周りをサンクッションを設け、自らの作品を展示したり、自転車やトイレで待ち時間を退屈出来るようにした。

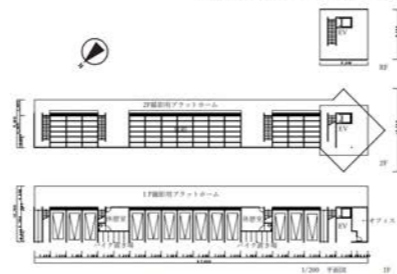
この施設をきっかけにより多くの鉄道ファンが集まり、地域の活性化と鉄道運賃への貢献が出来ることを期待したい。



プラットホームからのビュー



駐車場側からのビュー



先日山手線が大々的に工事運休になった時、不便を感じる人が多い中、ワクワクとした気分で駅のペDESTリアンデッキから線路を眺めている方が大勢いた。よくわからないが普段とは違う線路を走る列車を撮ろうとした人達だった。礼儀正しく、通行の妨げにならないよう気を配りながら。この提案を見た時にその光景を思い出し、確かに線路のそばに近寄れない日本にこのような「待つ」場所を作ることには新たなビジネスとなり、収益に苦しむ路線は一筋の光明になると思った。彼らの心をくすぐる「プラットホーム」は自然の中に溶け込み新たな美しい景色になると感じた作品である。

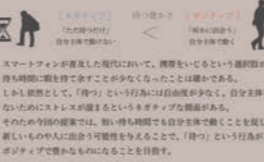
講評：審査委員 立山 智佳子

バス停ライブラリー

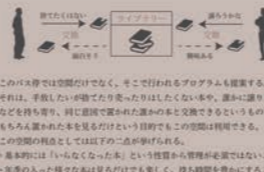
自由度が少なく、自分主体では動けないためにストレスが溜まるというネガティブな側面がある「待つ」という行為。この行為を豊かにするためには、自分主体で動くことを促し、何か新しいものに会おうなど、ポジティブに待ち時間を過ごすことができる場所が必要である。そこでこの設計では、駅前にあるバス停に「いらなくなくなった本どうしを交換できる」という新たな要素を付け加える。従来のバス停の平屋で均一な空間とは違い、夜形の屋根や視界を緩やかに遮る本棚などのゾーニングによって「快適なバス利用」と「ポジティブな待ち時間」が両立する空間を目指す。



01 「待つ」を豊かに ~自分主体で動く~



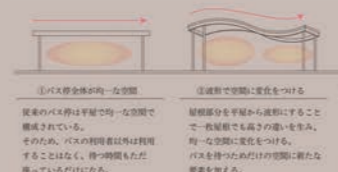
02 新たな待ち時間 ~本との出会い~



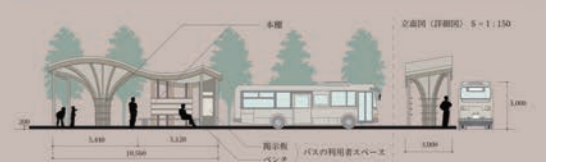
03 バス停ライブラリー ~駅前バス停にある意味~



04 ゾーニング ~新たなバス停のかたち~



05 詳細図面・寸法



06 唯一無二の空間 ~本が地域の特色を表す~



今回のコンペティションにおいてバス停というビルディングタイプは多数提案されていた。それらの案の中で、この案は、バス停に地域ライブラリーというプログラムを組み合わせさせた案であり、それ自体特に新しい提案ではないが、それぞれの地域の拠点としてのバス停に、利用者が不要になった、あるいは人に薦めたい本を提供することで、拠点ごとのキャラクターが生まれるというアイデアは面白いと思った。デザインも書架とバス停がバランスよく融合しており、作者のデザインセンスが伺える。ただ、本を手に取り、待ち時間を超えて、そこで過ごすといった行為も考えられ、そう考えると、本を読むスペースとしてのデザインはもう少し深化できたのでは思う。

講評：審査委員 岩田 章吾

渡部 颯 京都建築大学校

玉置 耕大 千葉大学



市原 佳奈・杉江 里佳子 愛知工業大学



阪本 花梨・川勝 実結 京都建築大学校

バス停の物語である。日常に埋もれた偶然の産物が、街の循環に発展する様を描く。「待つ」ことのための Bus Stopが、Bio Stopと化し、この点在する居場所が、人の循環を促すポンプとして寛大な建築になり得るという提案だ。基本となるユニットは、天気恵みを受けて自然のインスタレーションを生み、一体化された屋根と壁は自浄する。偶発的な小さな揺らぎはかけがえのない体験として日常を変える自然の恵みだ。雨宿りは忘れかけていた小さな出会いを蘇らせ、大気と水の循環は小さな日常「待つ」を壮大な物語に変えてしまう。この作品は美しいグラフィックと共に、実に見事な建築の詩だと、間違いなく思うのである。

講評：審査委員 小梶 吉隆

「新年を待つ」提案が複数あった中で建築的に解決を図っている秀逸な作品である。地形ラインに沿った配置、また来訪者が立って、座って、もしかしたら寝ながら眺められるレベル設定を地形斜面に合わせた断面的工夫などは、自然にストレスを与えない優しい建築であった。しかし、少人数施設利用者のためのパーティや仮眠、宿泊できる豊かな室内空間提案だけでなく、外で待つ大勢の待ち人達をわくわくさせる空間設定も提案が必要だと思う。私の初日の出鑑賞は、マフラーを巻き毛糸の帽子に手袋を着け白い息を吐きながら、パートナーとわくわくとその瞬間を待つことに幸せを感じていた。たぶん多くの鑑賞者も同様でしょう。そのような大勢の待ち人たちに楽しみを与えられる空間を、ぜひ考えてあげてください。

講評：審査委員 菅野 忠司



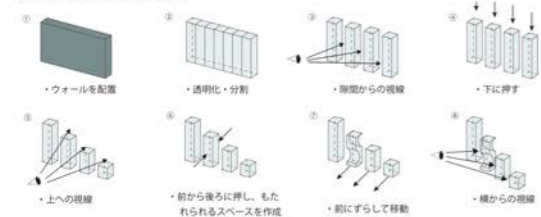
60秒のart

コンセプト

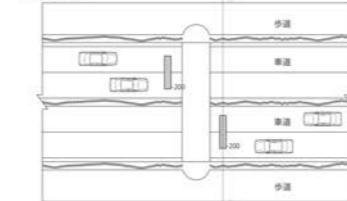
待つという行為は何かをすることを前提とした予備動作である。その際私達はスマートフォンを使用などで待つという行為から発生するストレスを中和しようとする。しかしながらこの行為は自動的にあり、我々のストレスを中和したいという気持ちから起こす行為なのである。そこで必要なのは他動的にストレスを中和することが重要である。このことから私は他動的にストレスを中和する有意義な空間を提案する。

1日に何度も訪れる信号待ち、平均的信号待ちはおよそ60秒である。人は人生のうち約6か月は信号を待っており、歩行者は60秒・運転手は90秒を超えるというイライラし始める。60秒という短い時間でも、映像を用いることで視覚的にも豊かにさせ「待っていると感じさせない」新しいインフラ空間を提案する。同時に、街行く人々に情報提供をすることができる有益なものを実現させる事を目指す。

視線と形のダイアグラム



平面図 1/300



断面図 1/200



■ ガラスのボールの表面に投下フィルムを張り付け、地面に映写機を埋め込み、車道側の地上に映像を投影する。

■ 映写機
 ■ LED回転ディスプレイ (LED光源が並んだブレードを高速回転させることで空間に浮遊する映像を作り出すことができるディスプレイデバイス)



車道からの映像 (車停止時)



歩道からの映像 (歩行者停止時)



歩道から映像を楽しむ

構造体であるボールは、形が複雑な構成で楽しさを与え、複雑・曲線的な形にすることで、隙間から車が見えるなど要素が入り交じっている。これが、見る者に誘引性を与え時間を忘れさせる。また、ボールは待ち時間以外にも、映像が映っていないときには、もたれたりできる休憩スペースとして機能する。

次に、デジタルサイネージによるメディアの表示である。デジタルサイネージはボールに投影され、人々に情報を提供する。これによりスマートフォンの役割を担い、待つという能動的な状態ではなく、情報を受け取る受動的なものへ状態を昇華させる。

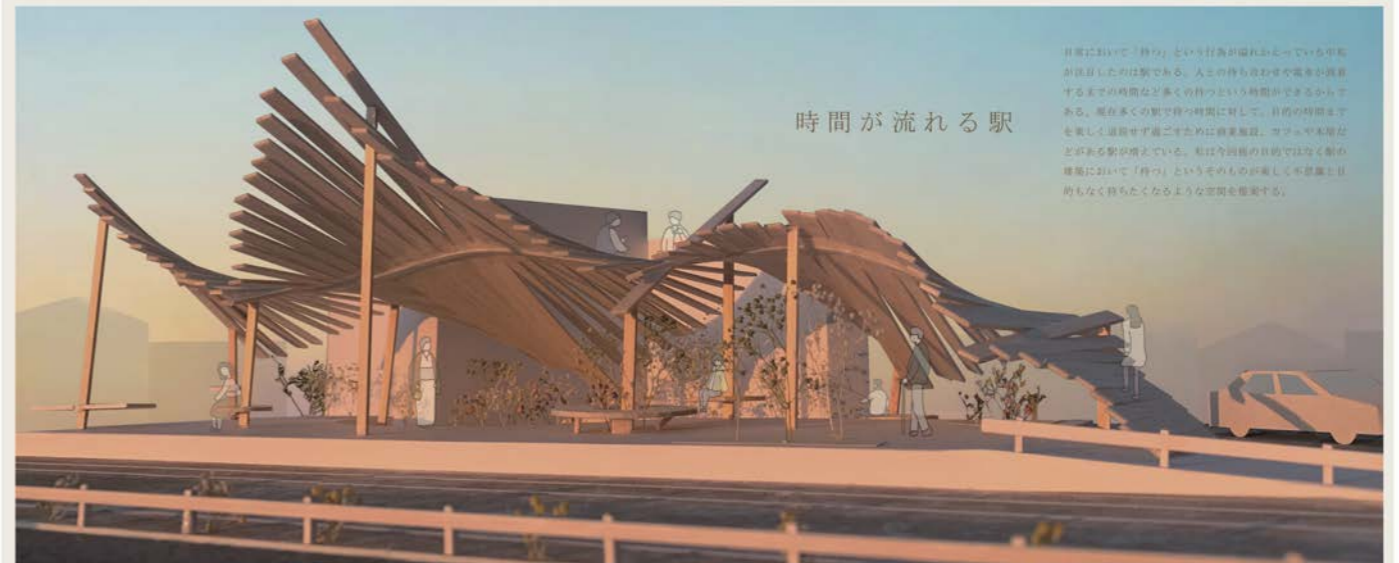
このインフラ空間は、歩行者だけではなく運転手の「待つ」でさえ取り除く、LED回転ディスプレイにより視覚的な変化を与え、遠慮な時間を忘れさせる。

これらのことから、歩行者と運転手に「待っていると感じさせない」新しいインフラ空間を作り上げる。

榎 和美 大阪産業大学

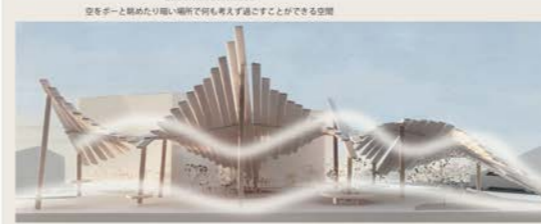
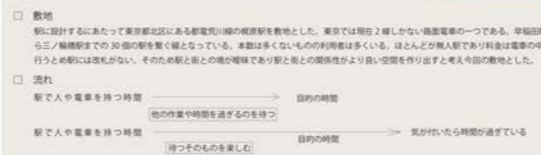
この提案は「待つ」という行為の分析を行った結果として「ストレスの中和」を他動的にあるいは受動的に行うことによって解決しようという提案である。道路に面した複雑な形態のガラスボールとそこに投影される映像や街行く車や人々が創り出す時間空間の非再現性。街の一角にこのようなスポットがあれば街の風景としても時間を忘れられて魅力的かもしれない。一方で、静かに会話をしたいとか好きな音楽を聴きたいなど人々の時間の使い方・要求は多様であり、今回の提案は少し暴力的に時間の使い方を迫ってくるようにも感じられる。技術的には難しいかもしれないが、見る側と見せる側が双方向に反応するような装置空間は無理であろうか？

講評：審査委員 川北 英

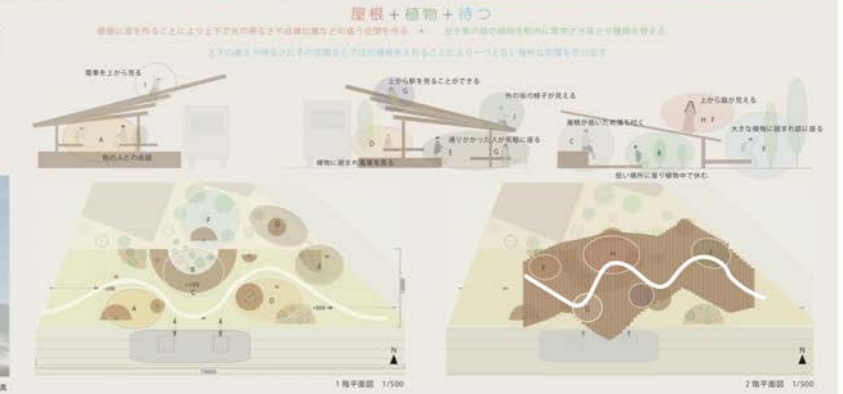


時間が流れる駅

日常において「待つ」という行為が繰り返されている中、待つという行為は、人々の待ち時間を短縮させるための時間的な要素を多く含むという時間があるからである。待ち時間の短縮という目的に対して、目的の時間まで美しく送迎せずとも、それは商業施設、カフェや本屋などがある駅が持っている。私は今回の目的では全く別の場所において「待つ」というものの本来の楽しみ、目的もなく待ちたくなくなるような空間を提案する。



夜の人が自然と流れるように出入りし理由もなくとどまりたくなくなる流れと空間



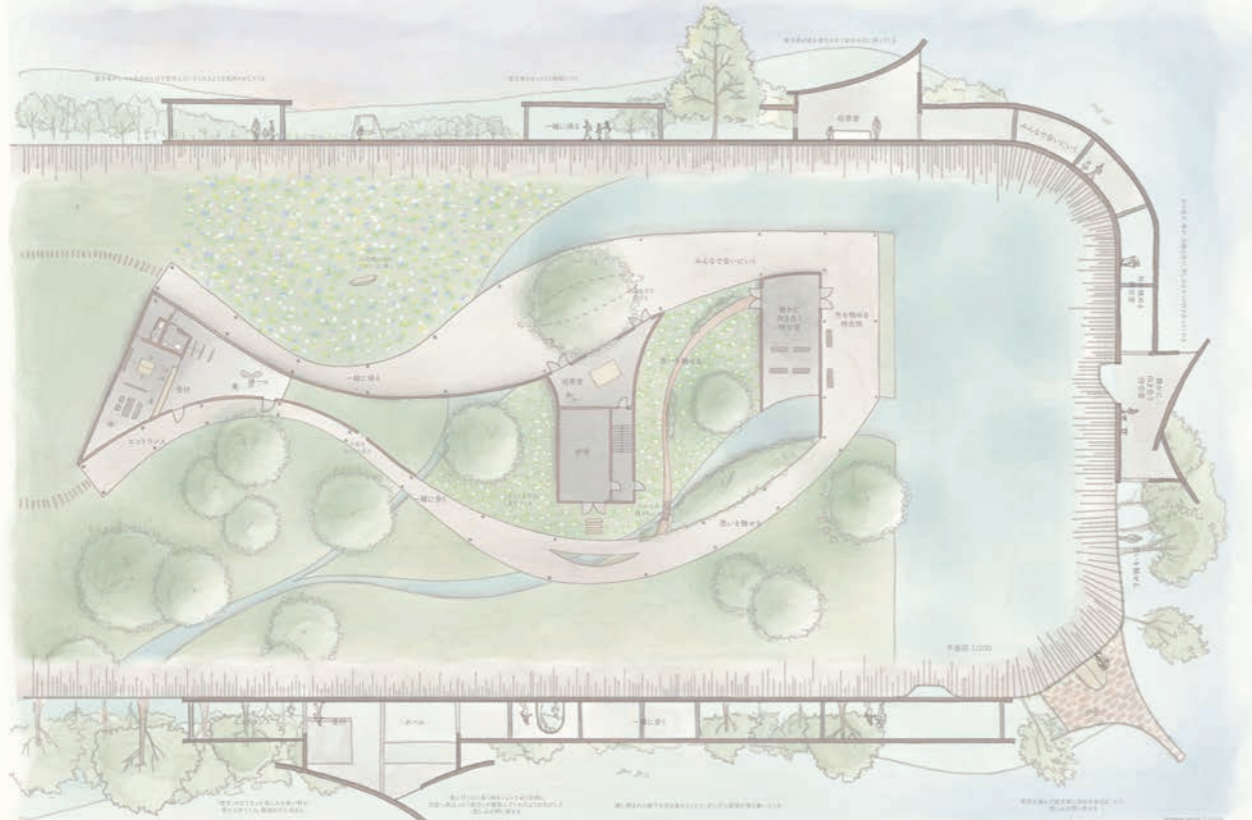
関根 大輔・渡邊 智哉・和田 直輝・林 明歩・長山 和奏 日本工業大学

待ち時間を楽しむ装置はカフェやブックセンターなどある機能を付加することで解決を図るのが常套手段であるが、今回の提案は空間そのものの魅力で待ち時間を楽しませるという手法である。空間体験そのものに重心を置いたところを評価したい。名作といわれる建築体験は、そこで過ごすだけで時間を忘れるものである。今回の提案は空間に変化をもたらすために屋根の形態や素材、あるいは植栽などの要素を取り入れて空間の魅力づくりしている点は面白いが、鉄道が到着し様々な人々が行き交うといった駅空間の特徴を今回の提案の中に欲しかった気もする。ニューヨークのセントラルステーションやロンドンのパディントン駅などはその良い事例といえる。

講評：審査委員 川北 英

彼方者と再会するまで

この火葬場は、建築が亡くなった妻の死が、一種に規定できる話しかの感情へ、変化していく時間になりあう感情である。大切な心で時間が流れるようにあう感情である。大切な心で時間が流れるようにあう感情である。大切な心で時間が流れるようにあう感情である。



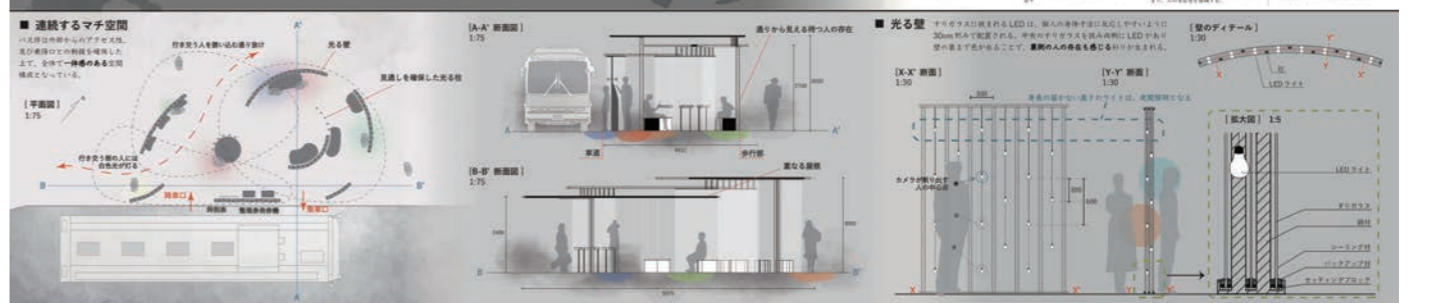
日高 理紗子 京都工芸繊維大学大学院 / 濱本 舞・力武 真由 東京工業大学大学院

様々な「待つ」施設が提案されるなかで、唯一葬祭場を提案した案であった。この提案は火葬から骨上げまでの時間を待つ時間ではなく遺族が大切な人の死を受け入れるための時間として位置づけ、そのための場を建築とランドスケープが一体となった空間経験として提案している。一見何気ない提案のようにも見えるこの提案は、場所と記憶のつながりに着目し、シーケンスを伴ったこの場での空間経験を通じて、死者を記憶する場としての火葬場という施設の在り方を提案しており、この点を評価した。その一方で、空間経験の作りこみや、火葬場としての現実的な機能への配慮という点では物足りなさも感じた。

講評：審査委員 岩田 章吾

滲みあう光色

人の場所と時間の重なりによって、光色が滲みあい、彩られる空間



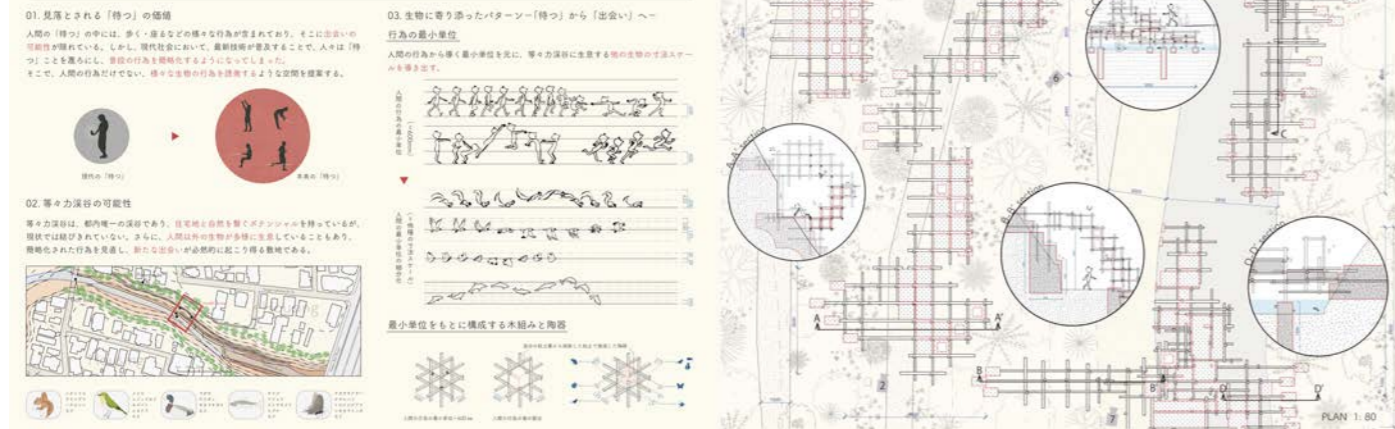
佐藤 良介・杉本 莉奈 東京大学大学院

殺風景で無彩色で変化のない、窮屈な行列による日常の「待つ」ことの代名詞・バス停を、待ちたい場所で自由に待つ、行列に並ぶことのない固有の風景と他者を感じる豊かな待ち方に変えようという提案である。「光色の滲む空間」・バス停はシステムが連動している。乗る路線に紐づいた系統の色が待つ間に偶発的に現れる。幻想的に点在するバス停や美しい曲面と合理的に整えられた動線計画も、同様に美しく透きなくまとめ切り、その手際の良さに顔かすにはおられない。さらに美しく色が滲む時こと時間帯の考察、多様過ぎるバスの乗降動線や立地条件など、より「待つ」のリアルな豊かさの発展を期待したいものだ。

講評：審査委員 小梶 吉隆



待行為の拡張【出会いの結び目】



上野 将輝・八木 このみ・山田 隆介 東京理科大学大学院

このプランの大きな特徴として、座って待つという行為だけでなく、歩いて待つことも待つという行為のひとつであるということ、歩くという行為が多くの出会いを生み出す可能性を広げること、これらの点に気づかされました。そしてその出会いは、通常では人と人を考えますが、人だけに限定しないで、人と動物も交えての多様な出会いをも含むということであると、そのような新鮮な観点が良かったです。プランに描かれた自然の中の構築物は、新築であり新しく目立ち過ぎているところが、少し違和感を伴った印象として感じましたが、今後、経年変化して木組みが古色になり、苔が生えたり植物の蔓が巻いたり、自然環境と馴染み同化しつつ、等々力溪谷の美しい景観の一部となっていくことが想像できます。

講評：審査委員 石津 勝



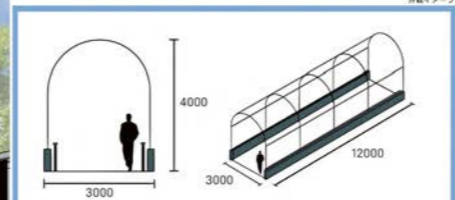


菊池 凌平 東京工業大学大学院

テーマ設定は“地方駅の駐車場”。がらがらの駐車場となかなか来ない列車という切実な状況設定がユニークで興味を惹かれる。一見さびれた活気のない空間を逆手にとって、都会では実現できない魅力付けをしているところは、なるほどどうなげける。コロナ時代に普及した“リモートオフィス”にも水平展開できそうで、過疎化に悩む地方都市の計画提案に有効かもしれない。駅前の風景としても変化があって面白い。安全性や管理の問題、法的処理などいくつかの問題点はあるもののこの手法は駅前開発の一つのアイデアといえそうである。シャッター街となった商店街の活性化などもこのアイデアで一度検討してはどうか。

講評：審査委員 川北 英

Daily life to read 読む日常。

仕様

ある広場にトンネル型のオブジェを設置。アーチ部分には日常で飛び交う「連絡」を提示する。また現代における情報の多さを感じ取れるガラス張りを採用した。そのため開放感を演出した仕様にもなっている。連絡は一定の時間を過ぎると自動的に消去される。この仕様は本家の伝言板と同様である。

発想のプロセス

「1992年東京の日常」その映像を見た時は驚いた。人が前を向いて歩いている。たまたまの境に立つ人。座っている人も前を向く。それは、今を生きている人間とは何か違うような気がした。堂々とした佇まいでかっこよくも見えなかった。『待つ』ということに対して現在と過去では大きく変化している。そこで、約30年前の人間模様からヒントを得ることとした。過去の人ほどのように待つ時間を過ごしたのか。また待つということに対してどう思っていたのか。そこで過去に思いがけず思い出したツールである「伝言板」に目を付けた。今回私が提案する「Daily life to read 読む日常。」は過去と現代での「待つ」の違いについて着目したものである。

コンセプト

人と人との「連絡」を第三者が読み取り、その人の人間模様や心情などを想像したりして楽しむものである。現代の社会においてもその情報量は限りなく多い。世に出回っている連絡をリアルタイムで表示し、それを鑑賞する。季節や曜日、時間帯によっても連絡することは違ってくる。例えば待ち合わせの連絡や約束の連絡、家族との連絡や恋人との連絡。喧嘩やくだらない連絡も存在する。今の瞬間、世の人が思っていること、感じていることを読み取ってはどうかだろうか？

伝言板

鉄道の改札口付近などに設置された黒板とチョークを用いる掲示板。その駅が管理しており、一定の時間になると伝言は、駅員によって消去される仕組みである。主に待ち合わせツールとして用いられていたが、特定の相手に向けたメッセージもあったそうだ。

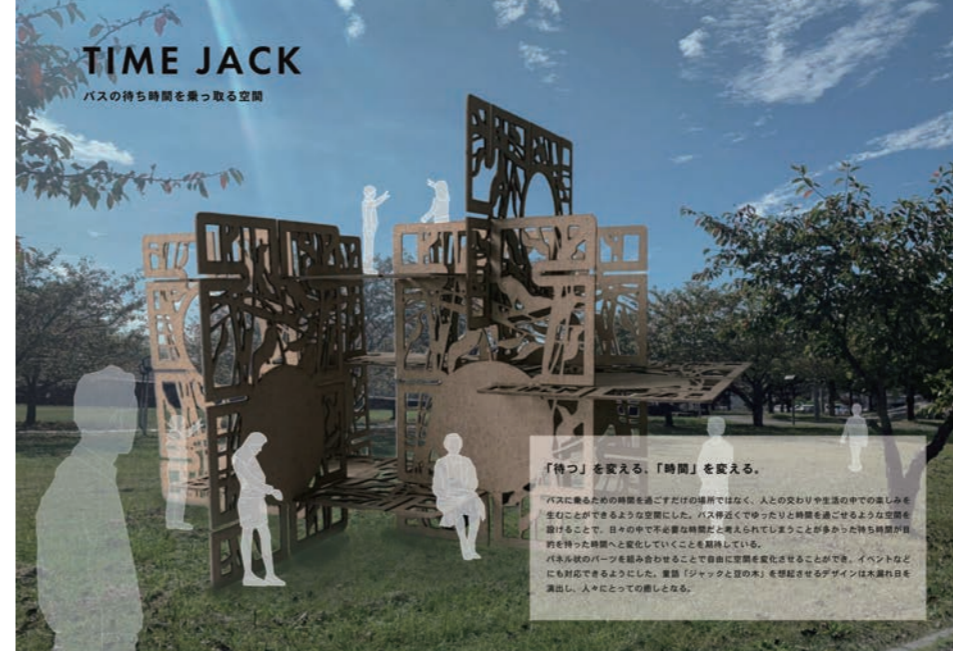
圓戸 壘 京都美術工芸大学

現代の待ち人たちは背中を曲げ下を向きスマホをのぞく、一方30年前の待ち人たちは背中をまっすぐに前を向いて伝言板を見ていた。伝言板もSNSもどちらも公開された情報を読むことに違いはないが、提案者は現代人の視線の違いが都市風景の佇まいに悪影響を与えていると気付いたのである。この着目点には感性を感じる。佇まいを正す建築的回答は、駅前なのだろうか広場に設置された12m×3m幅のガラスドームである。開放的な空間は単純ではあるが好感が持てる。しかし提案する以上、なぜこの形態なのか？なぜ12mなのか明確に伝えてほしい。ガラス面の面積は計算では約96㎡、一方30年前の伝言板は約2.5㎡、この面積差が過去と現代の情報量の差と言うのであろうか？

講評：審査委員 菅野 忠司

TIME JACK

バスの待ち時間を乗取る空間



「待つ」を食える。「時間」を食える。

バスに乗るための時間を過ごすだけの場所ではなく、人と交わり学生生活の中で楽しんでいる場所を食えるような空間にした。バス停近くでゆったりと時間を過ごすような空間を設けることで、日々の中で必要な時間だと感じられすぎてしまうことが多かった待ち時間が目的を持った時間へと変化していくことを期待している。


パネル状のパーツを組み合わせることで自由に空間を変化させることができ、イベントなどにも対応できるようにした。素材「ジャックと豆の木」を使用したデザインは先陣れ目を演出し、人々にとっての憩いとなる。

大学前 バス停

大学に通う学生はもちろん、地域の人や大学を訪れる人など、人が多く利用する場所。バス停がある場所を中心に道路が広がり、それぞれの学部棟や施設にアクセスができるようになっている。現在は屋根がなかったベンチでバスを待つ人が多く、雨には何もなし、日当たりが良く、周囲は芝生になっており、気持ち良い場所になっている。

敷地内での位置づけ

大学の玄関ともいえる場所に設けることで、学生と地域の人々にとっても使いやすい場所になる。また、大学の図書館等の施設は地域の人でも利用することができるため、そうした施設を使ってもらい、学生との交流を生き生きさせる。



川崎 恵李・井沼 満・小谷部 彩咲・藤井 夏希・水口 久海 滋賀県立大学

まず目を引いた魅力的な点として、切り絵状のパネルを差込み式で構成した、通常なら小さなオブジェとして装飾の映える形を、大きな造形物としても美しい装飾的な構築物として成立させたところです。そこにマイクロからマクロへの視点転換の発想を感じました。そして切り絵状の開口部は、機能的にも時に心地よい風や木洩れ陽を通して、居心地の良い休息場を形成して、バス待ちの人だけでなく散歩などの近隣の人の休息、また子供たちの遊具としても使用できるようになっていて、多用途な機能を持たせることに成功しています。バス停の位置が大学の入り口であることを利用して、近隣住民の人が大学構内へと入って交流するきっかけとなる場所としての提案も高評価でした。ただ構内に導く工夫がもう少しプラスされたらと思います。

講評：審査委員 石津 勝

ハウス・オブ・カードにヒントを得たデザイン

バス停付近が目当たりが良かったため、遠慮に目のあたりに感じながら過ごせるように考えた。人が居ることができるよう、空いている部分を多く取りすぎないようにすることで安定感をもって居ることができるようにした。また、敷地である滋賀県立大学は近所に住んでいる人の散歩コースとして使われることも多く、子どもからお年寄りまでに開かれた場所である。そのため、子どもが遊べる遊具としての機能を持たせることもできる。このように色々な目的に使われるため、もとのカードのようなパーツを自由に組み合わせて使えるようにするために、イームズのハウス・オブ・カードのような構成にした。



可変性のある空間がもたらすもの

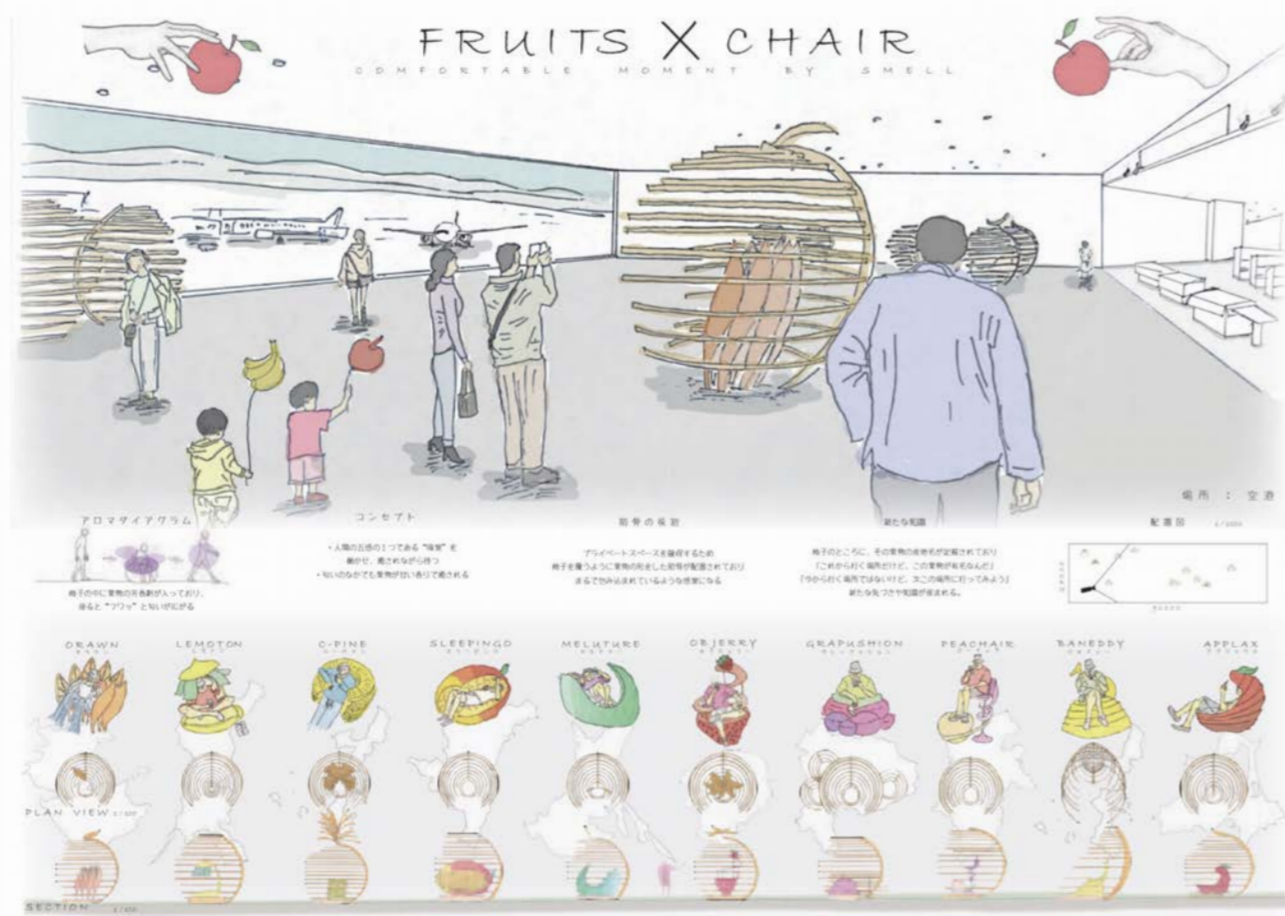
新型コロナウイルスの流行により、私たちの生活は大きく変化した。それに伴い、空間の在り方や用途とされる空間も大きく変わっていった。人とコミュニケーションが求められていた時代がー変じ、人と一定の距離を保つことが要求された。こうした時代の流れと共に変化する求められる空間に対応できるように可変性のある空間を構成できるようにした。それだけでなく、イベント等にに応じてパーツを増減することで使いやすい空間になる。



場所の良さを感じる待ち時間

普段当たり前に行っている大学や住んでいる地域の良さを改めて感じられるような場所にしたと考えた。ぼやかした太陽のあたたかさや、耳元から吹く風が感じられるようになっている。風が強い日もあつたため、風が通りつつ、ある程度遮られるようになっている。新しい目にはっと驚かせるような空間にした。





黒木 裕哉 大阪産業大学

こんな椅子があるならば何時間でも待つことができるなあ。こんな椅子があるならば待つことがワクワクできるなあ。「待つ」という行為はともすればネガティブな行為になりがちであると考えています。作品を選ぶにあたりできるだけポジティブな行為に変化できる作品を選びたいと考えていた中で出会えました。フルーツの匂いは香りであり臭いではありません。大人も子供もフルーツの香りをネガティブにとらえる方々は少なく、ポジティブにとらえられる方々が多い。しかもプライベートスペースを確保できる仕掛け（肋骨）により果物そのものに包み込まれることは子供のころならば誰もが一度は願ったことかと思えます。夢のようなものではありませんがこの世界にあってもおかしくない素敵な椅子です。

講評：審査委員 佐熊 孝浩



雨上がりを待つ

人は雨上がりを待つことが少なくなってきている。雨が降ってくるのを避けるように建物の中に入り、ショッピングやスマートフォンを触ることで時間をつぶす人が多いだろう。そこで、雨降りを書かす空間を提案する。

雨の匂い、雨の音、少し濡った空気、光が差す水面などから雨を近くに感じられるように、壁を作らず屋根と壁だけの空間にした。

懐かしい現代生活の中で雨降りという少しの時間で穏やかな気持ちになってほしい。



高木 遥花 大阪産業大学

雨が比較的好きな私でも、屋内から雨を感じる分にはいいが、外出先であろうと「ついてないな」と感じてしまう。恵みの雨とか云う割には、普段そんなことは忘れ、文句が出る。この提案はそういった感情を払しょくし、そばを通るたびに「雨ふらないかな」と待ちわびる素敵な作品である。雨の降り方により咲く花の形状が変わるのも「恵み」を感じさせてくれるし、都度景色が変わるのがいい。何とも言えない愛らしい形状、それが置かれることにより人々にもたらす、小さな喜び。一目ぼれました。

講評：審査委員 立山 智佳子

 <p>株式会社 総合資格 http://www.sogoshikaku.co.jp</p>	 <p>高島屋スペースクリエイツ 株式会社 http://www.ts-create.jp</p>	 <p>東リ 株式会社 https://www.toli.co.jp</p>
 <p>関ヶ原石材 株式会社 http://www.sekistone.com</p>	 <p>株式会社 デザインクラブ http://www.designclub.co.jp</p>	 <p>TOTO 株式会社 https://jp.toto.com</p>
 <p>株式会社 YAMAGIWA https://www.yamagiwa.co.jp</p>	 <p>有限会社 画箋堂 http://www.gwasendo.com</p>	 <p>コクヨ 株式会社 https://www.kokuyo.co.jp</p>
 <p>大建工業 株式会社 https://www.daiken.jp</p>	 <p>タキロンマテックス 株式会社 https://www.t-matex.co.jp</p>	 <p>株式会社 天童木工 http://www.tendo-mokko.co.jp</p>
 <p>ドリームベッド 株式会社 https://dreambed.jp</p>	 <p>株式会社 インターオフィス https://www.interoffice.co.jp</p>	 <p>株式会社 サンゲツ https://www.sangetsu.co.jp</p>
 <p>有限会社 ハブ硝子 http://glasmond.jp</p>	 <p>スリーエムジャパン 株式会社 https://www.3mcompany.jp</p>	 <p>矢橋大理石 株式会社 http://www.yabashi-marble.co.jp</p>
 <p>アイカ工業 株式会社 https://www.aica.co.jp</p>	 <p>株式会社 オカムラ http://www.okamura.co.jp</p>	

後援 (順不同)

公益財団法人 建築技術教育普及センター
 一般社団法人 日本インテリアプランナー協会
 公益社団法人 日本建築士会連合会
 公益社団法人 日本建築家協会
 一般社団法人 日本商環境デザイン協会
 一般社団法人 日本建築士事務所協会連合会
 一般社団法人 日本建築学会
 一般社団法人 日本建築設計学会
 日本インテリア学会
 公益社団法人 日本インテリアデザイナー協会
 一般社団法人 日本空間デザイン協会
 公益社団法人 インテリア産業協会
 一般社団法人 日本インテリアファブリックス協会
 公益社団法人 日本サインデザイン協会
 公益社団法人 日本インダストリアルデザイナー協会
 公益社団法人 商業施設技術団体連合会
 一般社団法人 日本インテリア設計士協会
 一般社団法人 日本住宅リフォーム産業協会
 一般社団法人 日本インテリアコーディネーター協会
 一般社団法人 日本インテリアアテンダント協会

Info

KIPA > コンペティション
<http://www.kipa.or.jp/competition/>



学生デザインコンペティション部会
 実行委員長：馮 植
 メンバー：小野 道也、神谷 剛、児玉 憲一、
 須摩淵 真範、矢野 梨花子

Graphic : Rikako Yano
 Award Book : 1046 design